

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：34316

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652103

研究課題名(和文) 落語の談話構造的研究：「間」と「音調」

研究課題名(英文) A Discourse Analysis of Rakugo Stories

研究代表者

角岡 賢一 (Kadooka, Kenichi)

龍谷大学・経営学部・教授

研究者番号：70278505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円、(間接経費) 270,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果として、和文論文四本と英文論文五本を発表した。いずれも大学紀要または学会誌である。2011年三本、2012年二本、2013年三本、2014年一本という内訳である。また海外学会での口頭発表は四回、行った。2012年と2013年に各二回という内訳である。内容は、英語や日本語の冗句あるいは落語で語られる小咄や本題を音響分析したものである。

研究成果の概要(英文)：Four papers in Japanese and five in English have been published during the period of assist. In the international conferences, four papers have been orally presented. The contents of the papers are the acoustic analyses of English and Japanese jokes and rakugo stories.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：人文学、日本語学

キーワード：音声 音韻 音調 音響分析

1. 研究開始当初の背景

この研究を進める背景は、研究代表者が選択体系機能言語学の枠組みに基づいて行ってきた英語の節 (= 文) 音調 (イントネーション) 体系である。選択体系機能言語学の枠組みが系統的に確立されたのは 1960 年代以降であるが、イギリス英語を対象とした音調研究は更に長い歴史を有する。節音調が担う意味や機能における先行研究において対象とされてきたのは、一部に日本語や中国語があるが大部分は英語である。

日本語の節音調についての研究に目を転じてみると、日本語独自の考え方を進めてきた背景が小さいと考えている。本研究はこのような傾向に一石を投じ、日本語独自の言語学研究を切り拓きたい。今回、落語に着目したのはこのような学術的背景と共に、談話構造として非常に興味深い側面が潜んでいると考えられるからである。これは話し手と聞き手の双方が無意識であるにも拘わらず、開口一番から最後のサゲに至るまでに首尾一貫した構造が用意されているということである。

2. 研究の目的

本研究では、日本語における特定の談話構造として落語を題材に採る。落語は日本の伝統芸であり、語り芸として独自の発展を遂げてきた。本研究では、言語学的視点から語り芸としての落語の特徴に焦点を当てる。具体的には、落語における「間」と「サゲ音調」である。

「サゲ音調」は、パラトーンの亜種として提起する。従来の研究ではパラトーンに二種類を区別していた。話題転換の高パラトーンと本題からの逸脱を示す低パラトーンである。本研究では低パラトーンに、冗談のオチにおいて直前に出現する現象を亜種として提唱する。落語ではこれを「サゲ」と呼ぶことから、これを仮に「サゲ音調」(英語では Punch line paratone) と定義する。広義には、パラトーンは直前において間を置くことが含まれている。落語をはじめとする日本の伝統話芸では、殊更に「間」が重視される。このように広義では「間」はパラトーンに包含された概念であるが、日本の話芸においては「間」が特徴的であるが故にこれを強調する。

研究の目的を次のように段階づける。

1. 初期段階では音声的事実としてサゲ音調が存在することを音声資料から探り、この音調が談話構造にどのような影響を与えるかという要素にまで考察を広げる。

2. 同様の音調が英語圏の話芸においても見られるか、異言語との比較を行う。

3. 最終的には「何故このような特徴的パラトーン構造に至るようになったか」という考察に取り組むことを目指す。

3. 研究の方法

本研究では典型的にサゲ音調が観察され

るという観点から、落語における音調型分析という手法を採用することとする。

まず、落語音源を用いて音調型の実例を収集する段階から始める。音声分析ソフトウェアによって該当する部分の音調型を分析し、無音時間 間 を測定する。

音声分析ソフトウェアにより、音調型を判断する上で鍵となる基本周波数と間 音声空白時間 を測定・分析する。一年目では、実例を収集して分析にかける物理的作業が主となると予想される。下降調と大括りするとしても、より高い出発点からの急下降と中高声からの緩やかな下降では発話場面や心的姿勢による違いが潜在しているものと考えられる。一年目の段階では、主として客観的データとして実例からこのような細かな差異を抽出する作業に取りかかる。節音調によって具現される表面型と、表される意味の間にどのような関係が見いだせるかというのは機能言語学にとっては中心的な研究課題である。

音調型は基本的に、下降・平坦・上昇の三種類と考えられる。この三種類以外では、英語における複合音調 (下降の後に平坦、上昇・下降の後に平坦) のように組み合わせによる第四・第五の型が考えられる。果たしてこのような複雑な音調型が、日本語においてある程度の普遍性を有するや否やという点を中心に据えて検討する。

Kadooka (2009: 209) では次のように、本題・その前に振られるマクラ、サゲが地口であるかそれ以外かという二つの基準を組み合わせることによって四分劃を試みた。

一 小咄・地口 二 小咄・地口以外
三 本題・地口 四 本題・地口以外

Kadooka (2009) はこれら四範疇について、それぞれ数例を挙げたのみであった。この段階においては、小咄・本題ともに地口オチが意外に少ないという傾向が明らかになっている。今後は、質 (数) と量 (サゲの分類) とともに充実させるのが課題である。

4. 研究成果

本研究においては、落語を音響面から分析しようと試みた。ここでは落語本編を分析対象とし、落語の中で語られる講釈 (講談) と覗き絡繰りを一人語り話芸という観点から落語の語りと対比させてみる。「くっしゃみ講釈」という落語において、講釈「難波戦記」と覗き絡繰「八百屋お七」の一節が語られる。同じ話者が語っているのであるが、落語 - 講釈 - 覗き絡繰りという話芸の酒類によって、語り口を変えねばならない。それが音響分析を通して、どのように分析できるかというのが最大の関心である。

今回の分析を通して、基本周波数 (音高) と音圧の相関関係が認められた。即ち「高い声では音圧が大きく、低い声では音圧が小さい」という関係である。また、サゲにおいて

特有の間を置いたり声を落とす「サゲ音調」も観察された。

落語一話において講釈や覗き絡繰りという異なる語り口の音響分析を試みた結果を、以下のように纏める。

・落語における日常会話：持続時間は一秒台、十拍から十五拍である

・講釈：声を張り上げる（高音、高音圧）持続時間は四秒前後、二十から三十拍、

・張り扇を叩くなどして間を置く

・覗き絡繰り：声を張り上げる（高音、高音圧）節を付ける、持続時間は三秒台、

・一音調単位当たり十六拍

講釈を聴いていた事前の段階では、落語より低い声ではないかと予想していた。しかし実際には高い声であった。もっと顕著な差は、一音調単位当たり四秒・三十拍というような「長広舌」であった。

これと共に、サゲ音調についても落語本編における大きな摘要可能性が示された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 九 件)

「落語「くっしゃみ講釈」における話芸語り口の音響分析」角岡 賢一、『龍谷紀要』35(2) 21-47 2014年3月、査読有り。

“An Acoustic Analysis of English Japanese Jokes: Focusing on Intensity” KADOOKA Kenichi *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* 35(1) 13-28 Sep 2013 査読有り

「上方落語演題の意味的分類」角岡 賢一、『龍谷大学国際センター研究年報』22(1) 49-69 2013年3月、査読有り。

“An Acoustic Analysis of English Monologue-and Dialogue-type Jokes” KADOOKA Kenichi *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* 34(2) 21-36 Mar 2013 査読有り

「日本語小咄の音響分析」角岡 賢一、『龍谷大学国際センター研究年報』21(一号) 33-50 2012年3月、査読有り。

“An Acoustic Analysis of the Punch Line Paratone in the Japanese Kobanashi Stories” Kadooka, Kenichi *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* Vol. 33 (No. 2) 17-37 March, 2012 査読有り

“An Acoustic Analysis of the Punch Line Paratone in English Jokes” KADOOKA Kenichi *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* 33(1) 1-13 Sep 2011 査読有り

“A Cross-linguistic Study of Punch Line Paratone in Japanese and English” Ken-Ichi Kadooka *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* 6.(1.) 1-15 Apr 2011 査読有り

「落語の談話構造：間と音調」角岡 賢一、『龍谷大学国際センター研究年報』20(1) 47-60 2011年3月、査読有り。

〔学会発表〕(計 四 件)

“An Acoustic Analysis of English Jokes” KADOOKA Kenichi *Linguistic Approaches to Funniness, Amusement and Laughter* 21 Mar 2013 Lodz, Poland

“An Acoustic Analysis of the Punch Line Paratones in English Jokes” KADOOKA Kenichi XIII Simposio Internacional de Comunicacion Social. Santiago, Cuba 22 Jan 2013

“An Acoustic Analysis of Telling Jokes in Different Situations” KADOOKA Kenichi *Prosody in Typical and Atypical Populations Reading, U.K.* 4 Sep 2012

“An Acoustic Analysis of English Jokes” KADOOKA Kenichi Third Belgrade Meeting of English Phoneticians Belgrade, Serbia 23 Mar 2012

〔図書〕(計 一 件)

“An Acoustic Analysis of the Punch Lines in English Jokes” KADOOKA Kenichi (Part: Contributor, *Focus on English Phonetics*) Cambridge Scholars Publishing Mar 2013

〔産業財産権〕
出願状況（なし）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（なし）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角岡 賢一 (KADOOKA Kenichi)

研究者番号：70278505

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：